

## 研究室紹介

### 名古屋市立大学大学院薬学研究科 医療薬学講座 病態解析学分野

教授 青山 峰芳

名古屋市立大学薬学部は名古屋市の南東部に位置し、近くに山崎川という桜の名所があり、高級住宅街に囲まれたたいへん環境のいい場所にあります。満開の季節に、ゆっくりと桜の下を歩くのは気持ちのいいものです。さらに、できたばかりの新校舎は緑に囲まれ心地いいです。

私の所属しております病態解析学は、循環器内科医である藤井聡先生が初代として赴任され、動脈硬化の病態および治療の研究を行うかたわら、6年制となった薬学科の学生への医療人教育に尽力されました。私は2代目として2015年2月に教授を拝命し、ちょうど1年を過ぎたところです。

まずは私の自己紹介をさせていただきます。1993年に名古屋市立大学医学部を卒業後、小児科医師として医療現場での貴重な経験を積み、その中で未解決な問題の多さを痛感し研究を始めました。憧れていた研究生生活は生易しいものではありませんでしたが、名古屋市立大学医学部生体制御部門の恩師加藤泰治前教授や浅井清文現教授はじめ多くの先生方に支えていただき、研究生生活を継続できました。研究の世界に入った当初は小児がんのひとつである神経芽細胞腫の克服に向けた研究を行っておりました。その後、浅井先生が主宰されている名古屋市立大学医学部分子神経生物学分野の教員となつてからは先人が開拓されてきたグリアと中枢神経疾患の関連の研究を中心に、多くの臨床の先生と関わりともに成長することができました。母校での生活の中で、自分らしさを活かす可能性を模索していたところ、ご縁があり薬学研究科への赴任となりました。

薬学研究科では前任の藤井先生のご厚意で多くの研究機器をそのまま使うことができる環境で

あったため、想像していたよりも早く研究を始動することができました。名古屋市立大学薬学部は6年制の薬学科の学生が4年生の4月から、4年制の生命薬科学科の学生が3年生の10月から研究室配属として研究室に加わります。立ち上がったばかりの研究室にもかかわらず8名もの学生が所属してくれました。学生達ひとりひとりが多彩な将来の夢と希望をもっており、研究室での経験が少しでも役立てばと願っています。名古屋市立大学からすばらしい研究成果を発信する人材、さらに日本の研究を牽引するような人材の育成を目指しますが、まずは地に足をつけて細胞培養手技の習得やウエスタンブロットがうまくなってきた結果とともに喜んでいきます。

研究テーマとしては、①これまで造血ホルモンとして考えられてきたエリスロポエチンが、エリスロポエチンシグナルを介したグリア-グリアクロストークによって神経保護効果を示すことを明らかにすることができました。また、②これまで小児に対する解熱剤として用いられてきたジクロロフェナクがインフルエンザ脳症の悪化に関わることが臨床現場で周知されていますが、ジクロロフェナクがアストロサイトやミクログリアの機能異常をひきおこすことを明らかにし、臨床現場での事象を基礎的に解析することができました。さらに、③現在ヒトiPS細胞から分化したヒト細胞を用いた研究によりヒト細胞独特の現象を捉えたいと思っています。臨床の現場では様々な治療の提案や治療の問題が報告されています。脳保護治療として脳低体温療法のような未だ詳細なメカニズムが不明な治療法の提案や抗インフルエンザ薬であるオセルタミビルによる異常行動のような思いが



著者（右）と岩城講師と桜の木の下で

けない薬剤による関与の可能性が報告されています。詳細なメカニズムの解析により、より効果の高いより安全な新規治療法を開発できるのではと思っています。また、分野名にあります疾患の病態解析を地道に行うことで、「病気を知って病気を治す」という気持ちで新たな治療法の開発への活路が見出せればと思っています。

私は臨床医を経て医学部の教員そして薬学部の教員となりました。とかく急ぎ足の昨今ですが、少し回り道をしながら研究の世界に入った自分だからこそできる何かがあると信じて目の前の課題に愚直に取り組んでいます。汗を流した夏やじつと寒さに向き合った冬を経て、多くの仲間とともに



にぎやかに歩きはじめた研究室

に満開の山崎川の桜が咲くことを願っています。

これまでにご指導およびご支援いただきました方々への感謝の気持ちを忘れず、努めてまいりたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。最後になりますが、神経化学会は私にとっての研究の原点です。これからもいろいろな刺激をいただきながら成長していきたいと思います。神経化学会の益々の発展をお祈り申し上げます。